
風林火山の貴族

五月雨 東

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風林火山の貴族

【Nコード】

N0347N

【作者名】

五月雨 東

【あらすじ】

疾きこと風の如く

徐かなること林の如く

侵しかずめること火の如く

動かざること山の如し

昔、トリステイン王国の水の貴族の大名家にわんぱく坊主ありけり。
その者の名 アズマ・テ・スイコウ。

そんな少年は祖父の出会いにより一変する。

ゼロの使い魔のオリ小説です。オリ主が無双です。
兎に角、まあ中傷言葉は控えめに。

始まることプロローグの如く（前書き）

駄作なること御免の如く。

五月雨 東にございます。

なんかゼロの使い魔にはまってしまったもんでその主軸とした小説
かこうと

思うちよりました。

ゆっくり楽しんでいてね！

始まることプロローグの如く

スイコウ家、その家は水の系統に長けていた貴族の家だった。

悪くてトライアングルクラスの魔法使いがバンバン出てきた。

しかし、その家には決定的な弱点があった。それはスイコウ家魔法使いの

殆どが女性という事である。男性の魔法使いが滅多に出てこないのだ。

そのスイコウ家の当主がシメル・デ・スイコウ公爵 関西弁みたいな名前である。

彼の妻の名前がクウエウ・デ・スイコウ、表向きのは水と風のドットだが、本気を出せばスクウェア系の魔法をいとも簡単に使えるのだ。

クウエウは妊娠中であつた。それも臨月、明日には出産予定である。彼女は男の子を望んでいた。

そして出産の日、当時トリスティン王国のスイコウ家に向かう老人がいた。彼はシンゲン・デ・ジラウ公爵、二つ名は「闘将」。

シンゲンは火、風、土のスクウェアで、ゲルマニアの王に信頼されているゲルマニアの貴族である。そして後にルイズの父であるラ・ヴァリエール公爵の兄貴分だった男であり、若いころ、彼らは一緒に冒険した仲なのである。

簡単にいえば子どもの頃の「織田信長」と「徳川家康」と思えばいい。

噂だがシンゲンは独自が編み出した「虚無」の魔法があるらしい。
当然シンゲンだけではなくルイズの父も、クウエウの子供を見るためにスイコウ家へと向かう。
クウエウの部屋

シンゲン、ラ・ヴァリエール、シメルの三人はクウエウが出産した赤ん坊を見上げた。かわいらしい元気な男の子だった。
ヴァリエール「おおお・・・これはかわいらしい・・・つい最近生まれた娘に匹敵する可愛さだ。」

シメル「まったくでございます。」

シンゲン「フッフ・・・嬉しゅうて涙が・・・グス・・・」

ヴァリエール「シンゲン殿、シメル殿、クウエウ殿この子の名はなんとしましょう。」

シンゲン「もう決めておる。アズマ、アズマ・デ・スイコウよ。」

シメル「アズマとは一体？」

シンゲン「東方の言葉で東と読む。ワシは数年間、東方の地で学問の修業をしたからのう。」

クウエウ「アズマ・・・いい名前ですね。」

アズマ「うゝ」

そして5年後のことである。
メイド「大変でございます！アズマ様がまた家を抜けだしました！」

アズマはあれからすくすく育った。時に家を抜けだし、森などによく足を踏み入れた。

クウェウ「すぐ兵をだしなさい！多少手荒でも構わないわ！」

メイド「ハッ！皆、すぐにアズマ様搜索の手出しをしろ！」

シメル「まあいいではないか。町などを探検することは国の事も・・」

クウェウ「馬鹿な事言わないで！あの子にもしもの事があつたら私心配で心配で死んでしまいそうよ！」

シメル「いや、でも平民の家にいる確率が高いから大丈夫だろう？」

クウェウ「平民？少しでもアズマに無礼を働かせたら殺すつもりよ？」

シメル「それは酷いのではないか、そうしたらアズマはお前に一生口を聞かぬぞ。」

クウェウ「そうなつたら薬であの子を洗脳するつもりよ。」

その頃商人の家

アズマ「うまい！さすが紅茶の商を営んでいるねジダ！」

ジタ「はい！こうしてアズマ様と一緒に茶を飲めるとは光栄の限りでございます。」

アズマ様〜！

アズマ「げっ！また追ってかあ？もうこれで10度めだよ。逃げるぞジタ！」

ジタ「は、はい！」

このアズマ・デ・スイクン。今はただのわんぱく坊主だが後に「風林火山」の二つ名で呼ばれ、伝説を遺すことになる。

続くことTO BE CONTINUED の如し

1話 優しく厳しいこと母の如く（前書き）

さて、始めました「風林火山の貴族」！これからも応援よろしく
お願いいたします。

1話 優しく厳しいこと母の如く

スイクン家

アズマは母のクウエウのお叱りを受けていた。いつも親の許可なく家を出たり、貴族のプライドなど一切なく平民と仲良く接していることだったり色々ある。

クウエウ「アズ、あんな平民のジタという屑にはもう関わるのはおやめなさい。貧乏が移るわよ。」

アズマ「でも母上、平民の心を知るのも貴族の務めです。貴族は平民がいてからこそ・・・」

クウエウ「もう聞きたくありません！貴方には一週間の謹慎を与えます！誰か！アズを部屋に連れていきなさい！あとアズ、後で二つ山の刑です。」

使用人「ハッ！」

使用人はアズマをズルズルとアズマの部屋へ連行した。因みに二つ山とは想像通りクウエウの胸の事である。彼女のバストはE95である。アズマはそれがトラウマになりつつあった。

クウエウはアズマが生まれてからアズマを大切に育てた。自身の得意な水の魔法でアズマに水の魅力を見せ、水の勉強をさせた。その甲斐あってか、わずか6歳でアズマは水のトライアングルになった。クウエウやシメル、ほかの使用人たちも号泣した。

しかし、アズマは風の系統が好きだった。よくアズマは風の魔法で

ジタや他の貴族の友達と遊んでいた。夏ときには水と風を合わせて氷を作っていたという。

クウエウはアズマが平民と仲良くすることに心地よく思わなかった。なぜなら平民は貴族に絶対服従するものだとかクウエウは考慮しており、平民が貴族に対等に話し合うのが気に入らなかった。

しかし何故ジタという平民が罪を受けないのか、それはアズマが許してくれると乞うたからである。

そんな時ジタが風邪をひいた。なかなか重い風邪になりかねないと町の医者と言った。

アズマはそのことを聞いてしまいすぐにジタの家に駆け込もうとした。しかし監視は厳重になってすぐに部屋に連れ戻された。

どうすればいいか。アズマは考えた。そしていい考えが浮かんだ。薬を作ればいいのだと。

時間は深夜に決行する。草原にある薬の材料になる薬草をとる、容易いことである。

深夜11:00になった。アズマはすぐに窓のカギを開け、風の魔法で見事に着地、屋敷を出ることに成功した。

だが夜道には盗賊やらがいつ潜むのかわからないので、別のルートを通った。

アズマはうまく行き草原についた。当然水のトライアングルなので薬の調合も習っている。すぐにアズマは風邪に効く薬草を胸いっぱい詰めて、全速力で屋敷に帰って走った。

幸い、アズマは誰も知らずに薬草取りに成功した。しかし問題は薬の調合である。経験はそこそこあるものの、実際誰にも気づかれずに薬を調合するのは至難の業である。

アズマは材料や薬草の量を間違えずに慎重にやった、器用なものの、彼の心はジダを助けたいという心の炎でいっぱいだった。

30分後、

アズマ「できたーーーーー!!!!!!」

と大声を放ってしまった。今までにない失態を侵してしまった。

クウェウ「よくできました。」と母クウェウの声を聞いた。

アズマ「は……母上……いつからそこに……」

クウェウ「いつからにも、アズが薬草を取りに行った時から気づいていたわ。」

アズマ「でも……何も足跡はありませんでした。」

クウェウ「アズが心配になって後に護衛をつけてみたのよ。気づかれなくてよかったわ。」

使用人たち「おめでとうございます！アズマ様」

アズマ「あ、あの母上！」

クウェウ「なぐにアズ？」

アズマ「この薬、ジタの家に届けてくれませんか？」

クウエウ「わかったわ。誰かこの薬をジタとやらの家に届けて頂戴！」

使用人「ははっ！」

使用人にアズマの薬を持たせ、全速力で屋敷を去る。

クウエウ「さて、勝手に屋敷をでた罰として・・・ひと月は私の部屋で寝入りして二つ山の刑で寝ること。」

アズマ「ええ〜！！それはないよ〜（涙）」

泣くアズマににっこりと笑う母であった。

続くことTO BE CONTENDEDの如く

1話 優しく厳しいこと母の如く（後書き）

次回「眠れること 獅子の如く」 楽しみに！

2話 眠れること獅子の如く（前書き）

最近私はチャージマン研にはまっています。

よくもこんなキチガイ小説を！

2話 眠れること獅子の如く

「アズマよ、トリステインの姫の遊び相手になれ。」

アズマは父が放ったその言葉を受託し、トリステイン王宮に行くことになった。

〈謁見の間〉

アズマ「シメル・デ・スイコウ公爵が長男、アズマ・デ・スイコウにございます。」

皇后「お待ちしてましたアズマ殿。早速貴方はアリリエッタ姫に会わせましょう。」

アズマ「有難き幸せにございます。」

アズマは皇后に姫の遊び場に案内された。

皇后「アリエンテッタ、元気に遊んでいますか。」

アリリエッタ「はい、母上、その方は？」

皇后「彼はアズマ・デ・スイクン。貴方のもう一人の遊び相手です。」

アズマ「アズマ・デ・スイコウです、姫。」

???「ちよつとアンタ！姫に失礼じゃない！」

アズマ「君は？」

ルイズ「私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよアズマ殿。」

アリリエッタ「いいのです、ルイズ。アズは得意な系統はなんでしょうか？」

アズマ「水です、水のトライアングルメイジです。けど好きな系統は風です。」（アズって・・・）

ルイズ「ふん！」（羨ましいわね。）

自己紹介も終わったので、アズマ達はアズマの得意な水の魔法で水遊びをした。全員水浸しになり続けた。当然3人とも自分たちの母親に叱られたが。

アリエンテッタ「アズ、その・・・ありがとうございます。」

アズマ「いいえ、当然のことです。」

ルイズ「まあ・・・楽しめたわ・・・ありがとうございます。」

アズマ「どういたしまして、ルイズ殿。」

アズマは疲れたと心の中で叫んだ。

次の日

アズマはまた家を飛び出した。しかし今回はジタの家には行かない。風の魔法修業としてみっちり自主トレーニングをするのだ。

アズマは森に入り木を切り倒して、風の魔法のキレをよくするためだ。しかし木をそんなに切り倒してはみんなに迷惑がかかるので、2、3本くらいで終わりにしている。

アズマ「よく頑張ったなあ〜今日も。」

アズマは家に帰ろうとした、その時であった。

グルルルル……………

どこからか声がした。アズマは振り返ってみると、10体の屈強の熊がいた。

アズマ「う……………うわあああああああん!!」

アズマは逃げた。全速力で逃げた。風の魔法で熊達の攻撃をかわしてきたが、とうとう限界の時が来てしまった。

行き止まりだ。アズマの後ろにはバカでかい壁。前にはたくさんの熊……………

もう終わりか

アズマ「やだ……………死にたくない……………死にたく……………」

その時であった。

ドクン ！！！！

アズマの心の中に声が聞こえた。

疾きこと風のごとく

静かなること林のごとく

侵しかずめること火の如く

動かざること山の如し

周りは静かになった。熊達は動揺していた。アズマの体中に紅蓮のオーラが漂っていた。

一体の熊がアズマに掌の爪で攻撃してきた。しかしアズマは火のスクウェアメイジ以上のファイアーボールで熊に反撃し、熊を倒した。

熊達は驚愕した。自分たちをいとも簡単に倒す修羅が今目の前にいることが。熊達は恐怖した、この少年、アズマに潜む獣の魔力に。

熊達はアズマに一齐攻撃した。だが勝敗はもうついていた。

アズマ「ファイアー……トルネード……」

半径300m程の範囲の炎の嵐に熊達は呑みこまれていき、跡形もなくなった。

アズマは熊達を消滅した後、ボタンと倒れた。

その後ろには・・・

「??? 成程・・・なかなかの潜在能力だ。奴を鍛え上げれば間違いなく無敵になる。」

続くことTO BE CONTENDEDの如し

2話 眠れること獅子の如く（後書き）

次回「前世のこと魂の如く」

3話 前世のこと魂の如く(前書き)

やっぱりアズマはあの人が前世です。

3話 前世のこと魂の如く

あの世

「???」もう400年ほどになるか・・・」

ひとつの魂がつぶやく・・・

「???」私は生きていたころ、家や豊臣に忠義を尽くしてきた・・・しかし時勢という名の不運に巻き込まれて戦には活躍したものの・・・まともな人生を送っていなかった。」

おそらく魂は安土江戸の時代にいた魂なのだろう・・・

「???」だがもう悔いはない・・・最後の最後まで忠義を捨てなかった。私にとってはいい一生だった。」

「???」だが・・・もう一度でいい。もう一度・・・人生をやり直したい・・・」

魂は嘆いた。その時だった。

魂の周りに光が輝き、魂はその光に従うように吸い込まれていった。

スイクン家

おぎゃ、おぎゃ、

赤ん坊の泣き声、

シメル「お、男の子だ、でかしたぞクウェウ。」

クウェウ？それが私の母親か・・・

ヴァリエール「名はなんといたすのです、シンゲン殿。」

シンゲン？武田信玄と同じ名前だ・・・一体どうなっているのだ・・・

シンゲン「アズマ、東方の地で東と書く。」

アズマか・・・いい名前だ。

クウェウ「よろしくね・・・アズマ。」

よろしく願いいたします、母上。

私はもとは真田源次郎幸村という名前だった。されどまた新たな名前がつけられた。

アズマ・デ・スイコウ

としての人生が始まるのだ！

6年後のスイコウ家

む・・・ここは部屋の中か・・・確か私は熊に襲われて・・・

クウェウ「アズ！」

アズマ「母上……」

クウエウ「大丈夫！？ けがはない！？」

アズマ「はい……」

シンゲン「大したものよの、あの熊の群れを突破するとは。」

アズマ「おじい様！！」

シンゲン「寝よ。お主はようやった。」

アズマ「はい。」

私は寝た、次に起きるのは翌日の昼であった。

スイコウ家会議室

シンゲン「さて、揃ったか皆の集。」

でかい円状のテーブルを囲むように座るスイコウ家とスイコウ家臣たち。

シンゲン「実はゲルマニアからの使者できたワシは閣下からあるお言葉をスイコウ家の皆に伝えに来た。そしてそれは言いにくい言葉である。」

シメル「と、言いますと……」

シンゲン「アズマはゲルマニアに5年間、預けることになった。」

みんな「「「「「な、なんだってー!!」「」「」」

家臣A「アズマ様を、人質に取るというのですか!？」

家臣B「くそつゲルマニアめえ!!」

シメル「なんとかならぬのですか!？」

シンゲン「こればかりではワシの力は及ばぬ、皆すまなんだ。」

シンゲンは深く謝罪する。

クウエウ「冗談じゃ・・・ないわよ・・・」

シメル「クウエウ。」

クウエウ「アズは渡さないわ!絶対に!絶対に渡さない!」

シメル「しかしそんなことをしたら戦争になる!それに5年なんだ、永遠に会えるというわけではないだろう。」

シンゲン「出発は2週間後だ。」

クウエウ「お父様!」

アズマ「スウ。」

3話 前世のこと魂の如く（後書き）

やっぱり小説を書くのは難しい。

これから毎日小説を書こうぜ？ 無理っす。

4話 旅立つこと修業の如く（前書き）

やはり世の中ぬこだよね。

4話 旅立つこと修業の如く

人質

それはひとつの弱み、人質にあつたものは条件の引き金になる。多くの誘拐犯は人質とひきかえに、仲間の解放や大金などを要求する。だが今回は違う。一つ的外交条件として使用する。いくつもの泰平の世や乱世にも使われてきている。

人質側の家族のスイコウ家は最悪の苦汁をなめられることになる。あの歴史も伝統も何もかも出鱈目なゲルマニアごときに公爵家のまだ6、7歳にしかなくていない、アズマ・デ・スイコウ少年を死地に追いやるといふことと等しいのである。

SIDEアズマ

私は人質になるらしい。いやなもんだな、人質は。

今日の日程は姫の遊び相手だ。全くもってこの姫はちゃんと皇后さまみたいに覇気のあるお方になれるのか心配だ。

因みにルイズとやらは私に何故そこまで魔法ができるかと質問した。私は「努力のたまもの」と返答した。そのときのルイズ殿はなんか暗くなっていたが。

夜のスイコウ家

スイコウ家の方々は必死にアズマを渡さんと努力した。大金をよう

いするとか、しかし仕事でゲルマニアにいるシンゲンは断固拒否した。

私はもう覚悟を決めている。いや覚悟というかゲルマニアがどういう世界なのかに興味をもった。

私は彼らの気持ちを和らげるために

アズマ「大丈夫だよ。僕はゲルマニアがどういう国かに興味をもったから。」

と言ったが母は

クウェウ「やせ我慢しなくても大丈夫よ。私たちはアズマを守るから。」

などとすこし病んでいた。

ゲルマニア旅立ちまであと1週間になった。もう家族たちは腹を括り、私をゲルマニアの卑怯行為？を許し、5日にわたるパーティーを開いた。

そこにはヴァリエール公爵家族など、ゲルマニアに反感をもつ貴族たちが私の家に集合した。なんか皆がどす黒いオーラをしていて怖かった。

ヴァリエール公爵は「気をつけろよアズマ君。ゲルマニアはなにをするか分からないからね。」と心配した。私は「ありがとうごさいます。」と礼をした。

4日めのパーティー

日にあたりに行こうとした私にルイズの姿があった。私は無視しようとしたらルイズが私の前に現れて、「私と一緒に踊ってくださいません」とダンスの勧誘をされた。

私は承諾した。私はダンスがそこそ上手かった。ダンスが終わった時に

ルイズ「アンタなかなか上手じゃない。」とほめられた。結構嬉しかった。

その後私はルイズと会話した。

ルイズ「あんたも災難よね。ゲルマニアの人質になるなんて・・・怖くないの。」

アズマ「人質上等。」

ルイズ「男らしいわね（汗）」

やっと、ゲルマニアに旅立つまであと10時間になった。支度ももうしてある。私は母に呼ばれた。

アズマ「母上、何か御用ですか？」

クウェウ「ええ。アズマ、貴方にこれを託します。」

と言って母は右手からルビーを出して、半分に分けた。

クウェウ「これは水の指輪。これで貴方は私とどこまでも通信できるわ。」

アズマ「母上……」

クウェウ「つらいだろうけど負けちゃだめよ。もし……寂しかったら母上に連絡しなさい。」

アズマ「母上!!」

私は母の膝もとでわんわん泣いた。

あれから5年後のことである。

山賊A「へっへ!これは大量だ!」

山賊達がいる。彼らは前に町を襲撃し、町の豪商からたくさん的高価な金銭になるもの強奪した。

山賊B「さて、次はどこにするよ。」

山賊C「スイコウ家だ。あの領地は結構もろい。すぐ潰せるぜ。」

ザッザッザッ!

???「下らぬ。」

山賊D「なんだ小僧！」

???「私か？ただ修業から帰ってきた若造だ。」

山賊E「やつちま………」

???「疾きこと風の如く。」ゴオッ！

山賊X30「ぐわあああああ！！！」

少年は山賊30人を倒した。

山賊A「な、なんだ貴様、何処のメイジだ！」

アズマ「私はアズマ！アズマ・デ・スイコウ！二つ名は『風林火山』！！！」

山賊A「くそう！ファイアーボー！微温いわ！」ぎゃあああああああ！！！」

山賊を全滅した。

いつになっても山賊は嫌な集団だ。しかし、久しぶりだ。このトリステインは。

続くことTO BE CONTINUEDの如し

4話 旅立つこと修業の如く（後書き）

自分的に修業編を書きたかったが辞めました。

ちなみに続くことでタバサをもっと強くしようと思います。

次回「烈風のことカリンの如く」

5話 烈風のことカリンの如く(前書き)

私作者は政治で世の中を変えられるとおもっていないぜよ!!

5話 烈風のことカリンの如く

トリスティン

帰ってきたか・・・懐かしいな・・・。ちょっと家に行く前に店で時間を潰していくか・・・

店

商人「いらっしやいませ貴族様！本日はどんな御用で？」

アズマ「私はただ時間を潰しに來ただけだ。何か冷たい飲み物はありますか？」

商人「はい。ちょっとお待ちを。」

商人は飲み物を用意しようと台所に駆け込んだ。

そうだ・・・ジタの所に行こう、奴はどうしているのだろうか・・・

????「静かにしろお!!」

!!!!

客「キャーワー!!」

一体何なんだ？前の山賊と言い、今度は強盗か？ん？強盗は貴族らしい女に銃を向けたぞ。いや待て！

その女はルイズか！？

ルイズ「ちよつと話しなさいよこの下賤の強盗！！」

強盗「黙れい！おう商人！貴様は店を出て町の奴らに伝える！王国が俺に10万エキューを用意しなければ、この貴族の女を銃殺するとなあ！」

うわあ。嫌なものだ。このような態度ではすぐ自滅するというのに。仕方がない、あまり目立ちたくないが・・・

アズマ「待て強盗よ。その女より私を人質にしたらどうだ？」

強盗「ほう。いい度胸だな貴様。名はなんだ？」

アズマ「アズマ・デ・スイコウ。」

客のみんながざわついた。まさかゲルマニアに人質にいるアズマ・デ・スイコウがトリステインに帰っていることが不思議に思っただ。

ルイズ「あ、アズマ・・・貴方なんでここに・・・」

アズマ「少しゲルマニアの人質の制限日がきれたのでな。里帰りしに来たのさ。」

さて。

アズマ「疾きこと風の如く。エアハンマー。」ゴウツ！トライアングルクラスの風の魔法が強盗を直撃した。

強盗「ギャア！！き、貴様あ！不意打ちとは卑怯な。」

アズマ「人質を取った男が何をいう。」

強盗「死ねい！」パン！強盗は銃の引き金を引き銃の弾はアズマの腹一直線に向かった。だが！

カアッ！アズマの障壁が弾を消滅させた。

アズマ「静かなること、林の如く。」

ルイズ「すごい・・・」

アズマ「侵掠すること火の如く！ファイアーボール！」これはスクエアクラスの火だ。

強盗「ぎゃあああああああああ！あちゅiiiiiiiiiiiiiiii
い！！！」

強盗は炎の中え断末魔の叫びをあげた。そして倒れた。

周りから歓喜の声がどわっと上がった。

ルイズ「ねえ。アズマ、こいつ、しんでのん。」

アズマ「いや。死んではないだろう。奴は三日もあれば回復するさ。」

タッタッ。

ルイズ「な、ちょっと何処行くのよ!」

アズマ「家に帰る。」

そういつてアズマは店を出た。

スイコウ家門

懐かしいなここは。兵も昔のままか。

傭兵A「待て?名を名乗らんか!」

アズマ「ここの知り合いだ。傭兵よ。」

傭兵B「あ、ああ貴方様は、皆アズマ様だ!アズマ様がお帰りに
なられた〜!!」

驚いているな・・・無理もない。

クウエウ「アズマあ——————!!」

アズマ「母上!」

クウエウ「ああ戻ってきたのね!心配したわよ!よかった、よかったわあ!」

アズマ「母上・・・きついです。」

クウエウ「ああ、ごめんなさい。さあ家に入りましょう。みんなが
待ってるわよ!」

私の無事ゲルマニア帰還のパーティーが開かれた。他の貴族は参加しなかった。というよりスイコウ家から断ったのである。

パーティーを終えた後は王宮に出入りし、皇后とアンリエッタ姫に謁見。厳しい修業の情勢などを私は詳しく話した。

続いてヴァリエール公爵に謁見。また、修業の情勢などを話した。

ヴァリエール「そうか、君も下賤のゲルマニアからの干渉からめげずによく耐えた。この忍耐力は見事といってもいい。」

アズマ「ありがたき幸せでございます。」

カリヌ「アズマ殿。修業の成果を私たちに見せてもらえませんか？」

アズマ「と、いいますと。」

カリヌ「私と手合わせお願いできないかしら？」

アズマ「いいでしょう。啞然とするかもしれませんが。」

ルイズ「ちょっとアズマ！挑発はよしたほうが……。」

アズマ「大丈夫だ。」

ヴァリエール公爵家庭

カリヌ「私は「烈風」のカリン参る。」

アズマ「私はアズマ・デ・スイコウ！二つ名は『風林火山』！参る！」

ヴァリエール「始め！」

合図の瞬間に

アズマ「エアカッター！」

先制はアズマがとった。

シメル「速い！」

ヴァリエール「修業の成果が出ているようだ・・・」

アズマ「疾きこと風の如く。だれよりも早い速攻で先制攻撃をとる。」

カリィヌ「甘いわ！エアカッター！」

スクエアクラスのエアカッターだ！

クウエウ「アズマ！」

ゴオツ！スウツ！

アズマ「エアハンマー！」エアカッターとエアハンマーが双殺した。

ルイズ「お母様のエアカッターを封じた!?」

カリィヌ（いや封じたのは確かだがそれだけじゃないわね・・・）

アズマ「静かなること林の如く。相手の魔法の魔力の4割を吸収し、自分の力にかえる。」

シメル「おお・・・」

アズマ「侵掠すること火の如く！ファイアーボール！ファイアートルネード！火炎車！マグマの導き！ファイアービーム！圧倒的な火の猛攻で敵に防御する暇もあたえぬ！」

アズマの火の猛攻にさすがのカリンも相当のダメージを負った。

カリィヌ「やりますわねアズマ殿。ここまでやるとは思ってもおりませんでした。しかし！はああああー！！」

ルイズ「駄目え！お母様それは！」

カリィヌ「カッタートルネード！」ゴオオオオオオオオオ！！

二人除く皆「わああああああああああー！！」

アズマ「な、なんという・・・」「山」ですら防ぎきれない・・・がはっ！！」

アズマは吹き飛ばされた。

カリィヌ「ぜえ・・・ぜえ・・・これで・・・」

アズマ「まだです・・・」

ヴァリエール「な、バカな妻の必殺技をつけてなお無事だと!？」

アズマ「動かざること山の如し。火、土、風、水の4重障壁で鉄壁の防御をほこる・・・だが・・・あと一発が限度だな・・・。」

カリヌ「貴方は強いですね。修業の強さは本当だったようです。ですが、もうこれで・・・」

アズマ「ファイアーウィンドビーム!」

火と風の魔法のビームでカリヌの杖を弾いた。

カリヌ「な・・・!？」

しかし・・・ドサッ。アズマは力尽きて倒れてしまった。

ヴァリエール「この勝負は恐らく引き分けた。急ぎ手当を!」

使用人「はいっ!」

風林火山のアズマ。伝説の第一歩を歩みだしたのだった・・・

6話 無にすること明鏡止水のごとく（前書き）

ごめんねー僕の小説が、こんなキチガイになっちまって（棒読み）

6話 無にすること明鏡止水のごとく

アズマは病室に運送された。その間にアズマは烈風のカリンと互角に戦った男として、人々に知れ渡った。

アズマの活躍に他の貴族たちは……

モブ貴族A「彼とウチの娘を結婚させたい！」

モブ貴族B「我がイツシキ家の婿になれば家は安泰だ。」などと結婚までも追い詰められていた。

しかしそれは至難の業である。それはアズマは公爵家だからだ。ヴァリエールの次に有力な家なので、得体のしれない貴族たちの誘いなど愚の骨頂に近い。

さて、病室の話に戻すが……

アズマは病室に運ばれクウェウにいろいろ質問されヴァリエール姉妹に興味を持たされた。

アズマは鬱陶しいと思った

（アズマSIDE）

私はカリン様に見込まれ半ば強引に弟子にされてしまった。祖父の修業にくらべれば祖父のほうはまだマシのほうだった。

ゲルマニアでの私の修業は3日間滝に打たれながら生活したりと結

構ハードだったが、いつのまにか終わっていたこともある。

しかし数時間の風の攻撃に耐えるという修業はやっていなかった。
正直言ってかなり辛い。

祖父はたまに私に東方の歴史上の文化や人物などを教えた。ものすごく楽しい事だった。いつか言ってみたいものだ・・・前世は真田幸村の私が言うのもなんだが。

深夜12時

私はある魔法の授業をいている。ゲルマニアに修業に行っていた時、どうしてもできなかった魔法が二つあった。

一つは「明鏡止水」。

この魔法は人の脈を触り魔法を唱えた人の心は相手のの体内に入る血液や体格を細かく調査する事ができる。そしてまれに黒い点粒などがあつたときその人は病気であるといえる。どうやったら相手の病気を治すことができるのかは、唱えた人の水魔法の魔力を相手の脈に注入することができ、黒い点粒が消える。

しかしこの魔法は祖父の専門外なので私が自力で修業している魔法だ。最初に11歳で「明鏡止水」魔法の修業を初めて実行し、今に至る。コツだけはなんとか分かったのだが体の半分までしか調査できない。

私は母に会いに行き、「明鏡止水」について話を始めた。そうしたら母は「もうそこまでできたら大丈夫よ。」と激励しただけだった。

私は洞窟に入った。亜人などはすべて倒していった。

ピチャン。小さな水溜まりがたまっていた。まさか・・・と私は思った。私はやっと気がついた。これだ・・・明鏡止水のカギは！小さなみずたまりから落ちる水。これこそが明鏡止水なのだ！

私は家に戻り母に頼んで脈を見せさせた。私は呪文を唱えた。

アズマ「人の明るさ鏡に写せず・・・止める水は潤うが如し・・・」

ピチャン。

アズマ「明鏡止水。」

成功した。私は全身の母の体の中を調査できた。いやらしい内容だが仕方がない。黒い点粒はなかった。

私はこの魔法をカトレア殿に使おうと思ったが今はやめておこう・・・

さて、私はまだやるべき事がある。小説の「真田十勇士」の作成である。

真田十勇士はもう原稿は完成している。私は父に真田十勇士を見せた。

シメル「これは・・・すごい・・・最後まで信義を貫く男の生きざまは見事なものだ。よし！早速商人たちに伝えよう！」

父は大喜びで小説の本を作成させると商人たちに言い伝えた。

真田十勇士は男女ともに大人気を得た。貴族の男性などからは「東方の騎士もすばらしい精神をもっている。」 貴族の女性からは「真田かつこいいよ真田・・・」などとひくコメントをしていた。

なんと売上百万本を達成。私はトリスティンはおるかゲルマニアやガリアなどにも一目浴びられた。

???「アズマ・デ・スイコウ・・・」

続くことTO BE CONTENDEDの如く

6話 無にすること明鏡止水のごとく（後書き）

次回「雪風のことタバサの如く」

7話 雪風のことタバサの如く（前書き）

私は叔父が憎い．．．．．

父を殺し母を壊したあの男だけは．．．．

でもなかなか斃す機会がない。

どうすればいいか．．．．

そうだ！あの男なら、今流行りのアズマ・デ・スイコウを利用すれば．．．

叔父を斃せるかもしれない．．．

7話 雪風のことタバサの如く

アズマSIDE

私はまたもやカリン殿に付き合わされた。エアカッターを連発するカリン殿は鬼だった。(涙)

私は連金の修業に専念した。私は土のトライアングルなので・・・耐性の強い銀を作ることはできる。

土のスクウェアは金をも錬金する。しかし私はゴーレムを作れないわけではない。ちゃんと耐性のあるゴーレムを錬金できる。

よく父に治水工事や領地の治安を向上させることを任せられる。言わずともかなりの成果を上げている。

父は「お前はやはり私の自慢の息子だ。」とほめたりした。正直照れる。

近頃家の家臣達の力が弱まって来ている。何千年という泰平の世だから無理もない。

そこで私は昔祖父からこんな歴史を聞かされた。

シンゲン「東方の偉人に高杉晋作という偉人がいた。その者は貴族なのに農民や町民、商人などを人材あるものを登用し、屈強なる兵隊を作り上げた。だからアズマよ、どんな者でも差別するな。見込みがある者はどんどん自分の仲間に使えよ。」

この言葉は私の胸を熱くさせた。

私は即行動にでた。経済面で商人の見習いたちや商才のある農民を仕官させ、さらには土のドットメイジなどを登用し、麦や新田、そして鉱山発掘にも貢献させ、大きな利益を得た。

軍事面では屈強な意思のある平民たちを傭兵にさせ、私がゲルマニアにいたころの修業などをさせ、屈強な兵へと変えた。

私は彼らをまとめて「五月雨隊」と名付けた。

数週間後、私はガリアの王ジョセフが、アズマ・デ・スイコウに会いたいと述べ、ガリアの国に向かった。

ジョセフとは「無能王」と呼ばれているが私はそうは思わない。彼には秘めた力をかくしている。しかし私はにわかにシャルル公と会いたいと思った。しかし彼はもういない。一度シャルル王と手合わせしたかった。

ガリア王謁見の間

ジョセフ「そなたが噂のアズマか。」

アズマ「はっ。初にお目にかかります。私、トリスティン王国シメル・デ・スイコウ公爵が長男、アズマ・デ・スイコウでございます。」

ジョセフ「そなたの作った「五月雨隊」とやはよくできている。彼らの結束は一人ひとり信頼されており、また強い軍隊である。少

なくともゲルマニアの半分軍事力に匹敵するだろう。」

アズマ「彼らをほめてくださって光栄でございます。」

ジョセフ「そう、彼らはまだいい。一番凄いのはアズマ、そなたよ。」

アズマ「なぜ？」

ジョセフ「決まっておろう。僅か数週間で屈強な兵や商人たちをたくみに操り、自身も風、火のスクウェアで水、土のトライアングルである、これ程の秀才があるうか。もしシャルルが生きていたなら手合わせしてくれというであろうな……。」

アズマ「私は何もしてません。彼らが自力で育ったのです。それに私はおじい様がいなかったら、ただの水の取りえの洩垂れ小僧にすぎませぬ。」

ジョセフ「そう卑下するでないわ。質問だがそなたの祖父はシンゲン殿であるう。」

アズマ「ご存じでしたか？」

ジョセフ「うむ。余とシャルルがまだ若いころだった。」

数十年前

シャルル「シンゲン殿！貴方と手合わせしていただきたい！「闘将」と言われた貴方の実力を！」

シンゲン「わかり申した。」

数分後、

シャルル「ぜえ．．．ぜえ．．．何というお人だ．．．まったく手がでないどんな魔法も跳ね返される。」

ジョセフ「それどころか我らにはたくさんの足跡があるのにシンゲン殿は一步も動いていない．．．完敗だ．．．」

シンゲン「いえ、貴方がたは強い。おふたりの結束があればワシも苦戦するいっぽうです。」

シャルル「強くなって帰ってくる。シンゲン殿、その時はまた．．．」

シンゲン「いつでもかかって参られよ。」

今

アズマ「そんなことが．．．」

ジョセフ「おっと昔話をしていたらこんな時間か．．．ついて参れ．．．我が娘とあわせよう。」

イザベラの部屋

ジョセフ「入るぞイザベラ。」

イザベラ「どうぞ父上。」

ジョセフ「イザベラよ紹介しよう、トリステインの「風林火山」の
アズマ・デ・スイコウだ。」

アズマ「アズマ・デ・スイコウと申します。」

イザベラ「年はいくつだい？」

アズマ「13歳です。」

イザベラ「若いね。五月雨隊の噂は聞いているよ。」

アズマ「ご存じでしたか。」

イザベラ「多かれ少なかれ国の家臣たちもアンタを高く買っている
からね。」

アズマ「それは有難いことです。おっと少し席をはずしていただけ
ませんか？」

イザベラ「どうした？」

アズマ「トイレです。」

私はトイレへと向かった。

廊下

「……………」

トイレを済ませたわたしの前に現れたのはここを通さんとする青髪の少女が立っていた。

アズマ「そこをどいてもらえませんか？イザベラ女王を待たせているので……」

「……エアハンマー」

少女は突如攻撃した。私は林でエアハンマーを吸収し、かわした。

「……見事。」

アズマ「私はアズマ・デ・スイコウ、貴方は？」

タバサ「タバサ……」

アズマ「タバサ殿か……。何故私を攻撃したのですか？」

タバサ「貴方の力を試したかった。」

アズマ「さっきのエアハンマー……。タダものじゃありませんな。」

タバサ「……………」

タバサSIDE

私は初めてアズマという男に会った。強かった。渾身のエアハンマーを見事にも吸収された。

彼の強さはまだまだのびるだろう・・・

もし彼がトリスティンの政治を牛耳ったら、間違いなくゲルマニアに匹敵する軍隊になる。

アズマ・デ・スイコウ・・・・・・・・

もし成長したら・・・私と・・・・・・・・

叔父を倒し新たなガリアをきずいてくれない・・・・・・・・

続くことTO BE CONTINUEDの如く

7話 雪風のことタバサの如く（後書き）

五月雨東「やっぱりもうネタが切れた・・・バカテスにはまっち
まった。」

次回「青銅のことギーシュの如く」

8話 青銅のことギーシュの如く（前書き）

やっぱりWの映画はいいな。ハッキリ言ってWだけでよかったんじゃないかな？

8話 青銅のことギーシュの如く

私はガリアを後にした。

私は2週間後戻ってきて六紋隊の強化に念をうった。

さて、もうひとつの問題がある。ルイズ殿だ。

彼女はカリン殿から聞くとどんな魔法を唱えても爆発して失敗してしまうらしい。

しかし可笑しい。普通魔法に失敗したらただしんとして何も起こらぬはずだ。

私は疑問に思ってルイズ殿に聞いてみた。

アズマ「ルイズ殿はどうやらどんな魔法も爆発して失敗するとか。」

ルイズ「何よ！馬鹿にしに来たの！」

アズマ「たわけが。だれもお主の事を馬鹿になどするとってないだろう。」

ルイズ「じゃあ何よ？」

アズマ「ルイズ殿の系統を推測してそれをルイズ殿に伝えに来ただけだ。」

恐らくは・・・

アズマ「虚無だ。」

ルイズ「きょ……虚無……馬鹿いわないで！私みたいな落ちこぼれが虚無ですって！！？」

アズマ「考えても見よ。普通、魔法の呪文に失敗したらなにもないはずだ。しかしルイズ殿の場合魔法ンの呪文に失敗したら爆発する……これ程の不思議はない。」

ルイズ「た、確かに……」

アズマ「なんなら試してみよ。自分の系統が虚無と思ってコモンマジックから唱えてみるといい。」

私はそう言って去っていった。

サイコウ家

シメル「アズマよ」

アズマ「どうしたのですか父上。」

シメル「前にグラモン元帥から手紙があった。六紋隊を指揮するアズマ・デ・サイコウをどうしても拝みたいと……」

アズマ「つまりグラモン領に行けと……最近仕事が多くて困ります。」

私ははあと溜息をついてベッドに倒れた。

グラモン元帥か．．．正直興味はない．．．

いま興味があるのはある魔法の完成だ。

4系統究極魔法の．．．

おっとこれは読者に対してネタバレ同然。黙ってしよう．．．

5日後

私はグラモン家の屋敷に到着した。はつきり言って皆怖い。軍人としての強さ故だろう。

お、早速グラモンの家の人か。

???「初にお目にかかるね、ミスタ・アズマ。」

アズマ「そういう貴方は何者ですかな？」

ギーシュ「堅苦しい発言はよしてくれ。僕はギーシュ・ド・グラモン、グラモン家の4男さ。」

アズマ「私はアズマ・デ・スイコウ。二つ名は「風林火山」よろしく頼む。」

ギーシュ「長い二つ名だね。」

アズマ「皆からそう言われる。」

ギーシュ「父上との謁見が終わったら僕がグラモン領を案内しよう。」

アズマ「宜しく頼む。」

私は長い長いグラモン伯爵との会話を終え、ギーシュにつられてグラモン領を案内された。

そしてギーシュとのやりとりも終え、夜になる。

私は錬金の最中だった。金の錬金をしていた。何度も失敗しても、私はスクウェアクラスには行かなければならないと思った。

ギーシュ「邪魔するよ。」

ギーシュが入ってきた。いったいなんだろうか。

ギーシュ「成程、金の錬金か……さすがのアズマ・デ・スイコウも努力は必須というわけだ。」

アズマ「当たり前だ。日々の精進を怠るべからず。私のモットーの一つでもある。」

ギーシュ「そうか。ああすまない。君に頼みたい事があってね。」

アズマ「金ならかさぬぞ。」

ギーシュ「いや君に金を借りるつもりはないから・・・」

アズマ「やはり一つか。」

ギーシュ「そう。明日の昼に手合わせしてはくれないか？「風林火山」と言われた君の実力を肌で感じたい。」

アズマ「承知した。」

そして明日の昼

ギーシュ「僕はギーシュ・ド・グラモン。二つ名は「青銅」、参る。」

アズマ「わが名はアズマ・デ・スイコウ、二つ名は「風林火山」、参る。」

しかし、勝負は私の勝ちになった。

ギーシュは何体ものワルキューレで私に向かって突撃したが、私は土の錬金で作った小鳥のゴーレムですべて粉々にした。

ギーシュ「な・・・馬鹿な・・・僕の渾身の魔力で作ったワルキューレが・・・ぜぜせ・・・全滅う！！」

何故小鳥のゴーレムがそこまで強いのか、理由は単純である。ゴーレムを作る際風の魔力を使っただけである。

アズマ「勝負ありだ。」

ギーシュ「完敗だ。アズマ、君がそこまで凄いとは……」

アズマ「いや、ギーシュのワルキューレの数も多かった。将来至高の土のメイジになるだろう。」

今ここに、漢の友情？が芽生えたのであった。

続くことTO BE CONTINUEDの如く

8話 青銅のことギーシュの如く（後書き）

次回は結構遅くなるんDA！

人物紹介とお知らせ（前書き）

Wが終わってしまった。結構おもしろかったのにね（OMO）
しかし夏休みが終わって私の体はボドボドだ！

人物紹介とお知らせ

アズマ・デ・スイコウ

この小説のオリ主

茶髪赤目のなかなかのイケメン

コモンマジックA

風 A + (スクウェア中位)

水 B + (トライアングル上位)

火 S (スクウェア上位)

土 B + (トライアングル上位)

格闘 A + (メイジ殺しレベル)

平民を愛し、王国の秩序を乱す者は玉砕する。真田幸村の生まれ変わり。

クウェウ・デ・スイコウ

青髪の長髪で青目の美人。

コモンマジックA

風 B (トライアングル中位)

水 S (スクウェア上位)

火 C (ライン中位)

土 B - (トライアングル下位)

格闘A+ (メイジ殺しレベル)

平民をごみ同然で見ている。最高の宝はアズマ。

人物紹介はこんなところです。

あと作者はゼロの使い魔よりチャージマン研が好きです。チャージマン研は結構面白いので、オススメします。

作者は勉強が大嫌いです。料理はちょっと好きです。最近茶団子を作ろうとしたら失敗しました(泣)。

作者は猫派です。理由は犬より小さいし、犬よりモフモフするからです。

あとリリカルも書こうかなって思います。

人物紹介とお知らせ（後書き）

次回「統べること風林火山の如く」

9 話 統べること風林火山の如く（前書き）

遅くなつて申し訳ありません。

9話 統べること風林火山の如く

アズマ SIDE

ついにカリン殿を倒す時が来た！私は深呼吸した。散々彼女には痛みと精神的苦痛を与えられた！だがそれも今日まで、14歳になった私は最早水も土もスクウェアになった。そして、あの魔法も短時間ながら使えるようになった。いざ、決戦のバトルフィールドへ！！

カリン「あらアズマ殿。如何なさったのですか？」

アズマ「カリン殿。私はやっと貴方を叩きのめす時がきた。」

私は暴言を言ってしまった。だが後悔はしていない。

カリン「口の聞きかたに気をつけた方がいいですわアズマ殿。ちょっと礼法を教えましょう。」

怒りを隠したカリン殿は私の決闘を申しこんだ。

アズマ「遠慮なく戦わせていただきますカリン老婆殿。」

そこにルイズが現れた。

ルイズ「駄目よ！アズマ！お母様を挑発しちゃったら…」

カリン「じゃあ遠慮なく潰させて貰うわねクソガキが。」

その刹那、スクウェアクラスの威力があるうエアカッター、エアニードル、エアハンマなどがカリン殿に向かった。

アズマ「疾きこと風の如く。」

ルイズ「出た！風林火山！」

カリン「甘いすわね。カッタートルネード！」

カリン殿のカッタートルネードが私の風の連続魔法を相殺した。

アズマ「侵掠すること火の如く！」

私は火の魔法を最大限に放った。さあどうでる！

カリン「さすがにこれでは無理がありますね。トルネードカッター！」

カリン殿は二発目のカッタートルネードを放った。あの人も最大限の威力で立ち向かってきただろう。そして私の火の魔法を相殺した。

実況SIDE

ヴァリエール「おーっと！カリン選手、防戦一方だ！ただでさえ攻城戦に使う必殺技を二発も使うとは！」

カトレア「しかしアズマ選手も同じです。林があるからといって数々の修羅場をくぐってきた母には容易に魔力を吸収できない。」

エレオノール「一瞬の油断が勝敗を分けるのね。」

ルイズ「お母様・・・アズマ・・・」

アズマSIDE

アズマ「おおおおおおおおおおおおおおお！！」

私は虎の咆哮の如く吠えながら魔法を放った。そしてカリン殿も同じだった。

カリン「はあああああああああああああああ！！」

ヴァリエールの城に離れた森は、もうただの荒野になっていた。

アズマ「やはり降参はしてくれませぬか！？」

カリン「誰が貴方みたいなクソガキに降参など！？」

アズマ「全く・・・かなわぬお人です。」

カリン「貴方もここ2年間よくここまで成長しましたね。ですがここまでです。私の最高魔法でとどめを刺しましょう。」

カリン殿は1、2、3と唱えて必殺技をだした。

カリン「Acccele Wind!!」

一瞬私はどうなったか覚えていなかった。私は山で防いだが、そこまでしか覚えていなかった。

バチ・・・

私は目を開けた。上には病院の天井。また負けたのか。

ルイズ「やっと気がついた。はぁ。アンタ本当に馬鹿すぎ、普通お母様に喧嘩を挑むこと自体可笑しいのよ。アズマが死ぬなんて思ってた冷や汗かいちゃったじゃない。」

アズマ「心配をしてくれてありがとござる。」

ルイズ「べつ、別にアンタの事なんか心配しちやいないんだからねっ!」

キターーーーー!これがツンデレというものであるか。

なんやかんやあつて3日後、

アズマ「おおおおおおおおお!!疾きこと風の如く!静かなること林の如く!侵掠すること火の如く!動かざること山の如し!」

私は特訓を重ねた。風林火山の名に恥じないように。

カリン「随分特訓熱心ですねアズマ殿。」

アズマ「カリン様・・・その、前の事は申し訳ござりませぬ！」

私はカリン殿に土下座した。

カリン「何を言っているのですか？私はむしろ嬉しいのです。弟子である貴方がここまで成長するなんて・・・。」

アズマ「えっ！」

カリン「いずれ「風林火山」が「烈風」を超える日を楽しみにしております。」

カリン殿はそうやって去って行った。

9 話 続けること風林火山の如く（後書き）

作者「さて、アズマ君、君にはちよつと質問コーナーの主催をやつてもらふことになつたぜよ。」

アズマ「何故？」

作者「きまつてる。結構この風林火山の貴族も191ptはいつたし。」

アズマ「それは理由にはならんだろう。だがまあ皆々様の質問をお待ちしております。」

10話 「学ぶこと魔法学院の如く」(前書き)

遅れてすいません。オリキャラ出します。

風林火山にはあと二つの戦法が残っていた。

知りがたきこと「陰」の如く

動くこと「雷霆」の如く

このふたつは風林火山の究極奥義である。

10話 「学ぶこと魔法学院の如く」

アズマ SIDE

私はカリン殿にまた負けてから鍛錬を積みなおしてきた。

そして15歳、私は念願のトリステイン魔法学院に入学する。

当然ルイズ殿も然り。しばらく六紋隊は筆頭家臣のムルクに任せろ。

ムルクとは私の家であるスイコウ家に長々仕えてきた貴族の家臣、グラク家の長男である。

彼は土のトライアングルで、子爵の位を得ている。

面倒見がよく、私の参謀役にもなってくれた人物だ。

話を戻そう。

私は早速男子寮に行く。あとは学校の探検と行く。

その時だった。

??? 「久しぶりだね。アズマ。」

どこかで聞いた声がした。

アズマ「その声……ギーシュか……久しいな。」

ギーシュだった。成長したな。

ギーシュ「君がこのトリステインに入学するとは・・・」

アズマ「悪かったか？」

ギーシュ「いや、全然。君がこの学校に入学したことはもうこの生徒たちに知れ渡っているからね。」

ああ、やっぱり。もはや私はトリステインに知らぬものはいないんだなあ。

その理由は、まず私の書いた小説である。「真田十勇士」のほかに「太閤記」、「信長」などの戦国ものの作品を多々出した。

そして魔法の評価である。私は風、水、火、土のスクウェアとして有名であった。魔法衛士隊にスカウトされるほどの実力だ。はつきりいってワルド殿より強いと称賛されるほど。

しかしそんなものは不愉快である。私は只魔力が常人より少し上なだけなので。

私は男子寮についた。そして荷物を運び終わった後、寮をでた。ランニングである。

私は必ず朝5時程にwake upし、5キロほどランニングする。日々の鍛錬怠るべからず。

そしてランニングが終わった後錬金の訓練をする。耐性の強い金を作り続ける。

「???「邪魔をするぞ!」

と、突如私の部屋から誰かが来た。

ヴィリエ「わが名は風の名家に生まれしヴィリエ!「虎王」のアズマ・デ・スイコウ!貴様に決闘を申し込む!」

アズマ「虎王?どういうことだ?私の二つ名は「風林火山」だぞ?

ヴィリエ「アンリエッタ姫がそうおっしゃっていた!」

あの姫・・・よりによって私の二つ名を変えおった。

アズマ「分かった。それで何処で決闘をする?」

ヴィリエ「ついてこい!案内する。」

AFTER A WHILE

ヴィリエ「がっ!さすがは・・・虎王・・・」ガクッ

アズマ「風林火山だ馬鹿者。」

わたしは余裕でヴィリエに勝った。彼の放つ風の魔法を、「林」で全て吸収し、「風」で一撃で終わらせた。

さて、私は一体どんな魔法学院生活が始まるのやら・・・」

続くことTO BE CONTINUEDの如く。

10話 「学ぶこと魔法学院の如く」(後書き)

しばらく休載します。なぜならもし続こうとすれば今頃は病院（いんげん）に行
ってしまいますから。

11話 不穏なること闇の如く（前書き）

久しぶりの連載です・誠に申し訳ありませんでした・

11話 不穏なこと闇の如く

アズマSIDE

私の魔法学院生活は夏へと入った・

これまで私は女には憧れの的になり男には妬みの的になった・

授業の方はハッキリ言ってつまらないの一言だ・

ギトー先生には「疾きこと風の如くとは風の強さをなかなか理解しているではないか！」と言われ、コルベール先生には「君の真田十勇士、各国で評判になっている」と言われる。

私を高く評価するのは良いが買い被らないで頂きたい・

女子生徒からの評価はピンク髪「彼は優しく強い虎よ彼は将来トリステインの内政、軍備を統べる男なのかも知れない」

赤髪「彼は私が求めた業火そのもの！この前平民をいたぶるバカ貴族を見て彼はそれを止めようとしたわ・バカ貴族は当然怒って彼に決闘を申しこんだわ・けどアズマの完勝・アズマはバカ貴族を説教したわ・内容は孔子という東方の偉人の教えらしいわ・バカ貴族が蟻に見えた・彼は…アズマは理想の貴族そのものよ・人に優しく己に厳しく欲が少なく教育も出来る・もう思い出しただけで興奮しちゃう！」

青髪「彼に会ってから自分を忘れてしまう・それだけ」

グラモン家の4男「彼はなんといっているのだろうか？虎といった

らいだろう。」

以上感想でした。

アズマ「単純だな！それに赤髪言葉多い！！」

私は夏休みに入ったので久しぶりに六紋隊の現状を見に行った。

六紋隊本部

アズマ「久しぶりに帰ってきた。」

隊員A「アズマ様！」

隊員B「お戻りになられたんですね！？」

アズマ「お前たちの顔と六紋隊のこれまでの成果を見に行こうと思
つてな？？？」

隊員A「はっ！現在六紋隊の資金は600万エキュー。新田開発や
土メイジを使った鉱山採掘。商人たちの輸送販路などを集めての結
果でございます。」

アズマ「随分稼いだな。よくやった。」

ALL隊員「有難きお言葉！！」

アズマ「いや我々は同士なんだ。堅苦しい言葉を使わないでいた
きたい。」

隊員C「いやアンタ使ってんじゃない。」

その時事件が起こった。

隊員D「た、大変でございますー!!」

隊員Dが駆けつけてくる。

アズマ「何かあったのか？」

隊員D「スイコウ領の新田が????破壊されております!!」

ざわっつ???!!皆がその言葉に驚愕した。

アズマ「犯人の目星はついているのか????」

隊員D「はい、六紋密偵部隊の話だと奴らはスイコウ家の屋敷の裏山の洞窟にアジトを張っているとの情報です。奴らの数は30。しかし奴らは土と風と火のメイジのトライアングルが平均10人。迂闊には近づけませぬ。」

アズマ「分かった。お前たちは待機していてくれ。私一人で奴らを斃す。」

隊員A「あ、アズマ様、お待ちを!アズマ様にもしもの事があったら????」

アズマ「ならば六紋隊でかなの実力者を私の護衛として同行してくれるか？」

隊員「ははっ!!」

こうして私は賊退治に向かう。

スイコウ家の裏山

アズマ「久しぶりだな。ここの洞窟も。」

私たちは草木に隠れて賊のアジトを見ている。

精鋭隊員「あの……（、？、）知っているんですか？」

アズマ「ここは私が子どもの頃よく入っていた場所だ。いつも母上に叱られたら此処に入っていた。」

精鋭隊員「では早速入りましょう。」

私達は洞窟に入った。

お約束の賊登場だ。

賊A「これはこれはここの領主様が来られて……」

賊B「一体何しにこられたんですかねえギャハハハハ!!」

アズマ「そんなもの決まっている。」

疾きこと風の如く。

ドゥーン!!!

アズマ「お前達を潰しにきた。」

精銳隊員（な、なんて力だ・流石アズマ様…）

賊のリーダー「くそつ流石といった所か……だが……」

賊達は20匹の巨大ゴーレムを作りだした・

賊のリーダー「どうだ！これでは何ともできまい！」

アズマ「哀れなり」風風風風風風風土土土土土土土土土

豪風土剛！

ドゥーン！と大きな音がした。するとゴーレムはすでに消滅しており、残ったのは私と精鋭隊員達と賊のリーダーだった。

賊のリーダーはガチガチと齒を鳴らしてうつ伏せに倒れている・
私は賊のリーダーに杖を向ける・

アズマ「何故私達の領地を襲った？」

賊のリーダー「だ、誰かの命令でやった、それだけだ！」

賊のリーダー「その黒幕は……」

ズキューンと銃声らしき物が聞こえた・

私は何か会ったのかハッキリした・

私の前には賊のリーダーの死体が倒れていただけだった・

アズマ（一体誰が……）

続くこと TO BE CONTINUE の如く

11話 不穏なること闇の如く（後書き）

お知らせ

只今アズマの使い魔募集中・

12/2 一部訂正

12話 夜霧のことミストの如く（前書き）

久しぶりの投稿です。今回は主人公のライバル（？）登場。因みに自分はスパロボのあの人物が大好きです。

12話 夜霧のことミストの如く

アズマSIDE

六紋隊の仕事、どうやら今回は人材収集だ。

平民であろうが貴族であろうが商人であろうが優秀な人材を登用し、トリステイン王国の利益、はたまた経済の好調を保ち、軍部においても精鋭を鍛え上げる。それが六紋隊だ。

私は父の部下であるレックス子爵に、「馬鹿なせがれを鍛え上げてほしい。」との要請が入った。

私はそのレックス子爵の子どもと会談した。

レックス子爵「こちらです。ミスタ・アズマ。」

私は扉を開くとそこには茶髪でどっちかというとなんか裏切る可能性が高い少年がいた。

ミスト「はじめましてアズマ隊長。俺はレックス子爵の長男、ミスト・レックスです。」

ミストSIDE

六紋隊どうせただの自警団に近い。親父の奴、うちの馬鹿なせがれを鍛え上げてほしいだなんて、俺は水と風のラインメイジ。トリステインの幹部候補生なのに、得体のしれないどこぞの貴族に従わなくちゃならないんだ？

そして六紋隊は商人や平民もいるって話じゃないか？確かに平民や商人なくして我々貴族は成り立たない。だがらって魔法も使えない

人たちを集めても只の足手まといにすぎないんじゃないか？

兎に角挨拶をしよう。

ミスト「はじめましてアズマ隊長。俺はレックス子爵の長男、ミストレックスです。」

アズマ「こちらこそはじめまして、私は六紋隊の長、アズマ・デ・スイコウという。宜しくお願いする。」

な・・・

ミスト「アズマ・デ・スイコウだって！！？」

アズマ「そうだが・・・少し驚愕したのか？」

アズマ・デ・スイコウってあの烈風のカリンの弟子で「風林火山」と呼ばれている。現役ではトリステイントップクラスの騎士、まさかこの人が六紋隊の隊長をやっていたなんて・・・

アズマ「では本題に入ろう。ミスト君、君は今のトリステインをどう思っているのかね？」

ミスト「さあ、なかなか良好じゃないんですか。」

アズマ「確かに、今のトリステインは良好、普通の貴族はこれが当然の見解といってもいい。だが今のトリステインは腐っている。いずれ1、2年あたりで瓦解する可能性が高い。」

ミスト「でもそれは六紋隊でカバーできますよね。」

アズマ「確かに六紋隊はトリステインの精鋭になりつつある。ただしそれだけじゃカバーできない。ゲルマニアと同盟を結んでも

両国は犬猿の仲に近い。アルビオンについてはトリステインとは良好だ。だがいずれトリステイン崩壊の序曲としてアルビオンが崩壊するかもしれない」

ミスト「じゃあどうすればいいんでしょうか？」

アズマ「昔・・・おじい様が言っていた。トリステインの伯爵時代のおじい様は若いころエルフの里に訪れたことがある。」

ミスト「な・・・エルフの里に!？」

アズマ「そう、そして彼はエルフとはかなりの衝突があったものの次第にその邪念は消え、エルフとの関係も良好になったといわれている。されどそのおかげでトリステインの上層部は激怒しおじい様は左遷させられた。」

ミスト「凄い人ですね。」

アズマ「そう、私の最も尊敬している人物の一人だ。」

ミスト「しかしそれとトリステインの崩壊と何の関係が・・・」

アズマ「それは後日話そう。」

ミスト「はあ・・・」

アズマ「さて、ミスト君、いくら君が貴族だからって特別扱いはいできない。私は君をレックス子爵の子供ではなく一人の六紋隊の隊員として見る。そして君を・・・みっちり鍛え上げるから覚悟しておけ。」

ひ・・・ひいつ！！何だこの覇気は！？人間の出す覇気じゃない！
？こんなに俺とこの人の大差があるとは思わなかった！！

アズマ「さて・・・行こうか。」

そして六紋隊本部、

アズマ「あと9周だ。それが終わったら休憩だぞ。ほら、F I G H
T F I G H Tだ。」

ミスト「ぜえ・・・ぜえ・・・。」

1周1、5kmなんて・・・こんなの普通じゃ考えられない！それに20周だなんて・・・

六紋隊の一員「ほれっどうした若いの！」

六紋隊の一員「こんな軟弱な貴族様がいたら世も末じゃのう。」

くっ・・・おちつけ、こんな安っぱ挑発に乗るな、うおおお
おおおおおおお！！

アズマ「さて、夜霧のミストか・・・なかなかいい精鋭になるかもしれないな。」

続くこと T O B E C O N T E N U E の如く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0347n/>

風林火山の貴族

2011年5月15日14時41分発行